

1986年8月17日 長坂聖マリヤ教会 平和記念ミサ 説教

私達を平和の器にしてください

司祭 マイケル・イブグレイブ

(現 英国教会ウーリッジ教区主教)

皆さん、お招きによって話ができることは、非常に喜ばしいことです。又、家族と一緒に長坂聖マリヤ教会の礼拝にあずかれることも、とても楽しいことです。本当に、どうもありがとうございます。

ことに、このような戦争を記念し、平和を願い求めるための聖餐で皆さんと一緒にすることは本当にいいことだと思います。子供の時から、私は戦争の記念のことに慣れてきたのです。普通のイギリスの市町村と同じように、育った小さい村の中では、英語で war memorial という十字架の形の石像が建てられています。その十字架の表面にドイツ人や日本人に反対して戦って倒れた村人の名前が沢山記されています。その村の人口は六百人ほどで小さいですが、百名以上は二十世紀の戦争で死んでしまいました。毎年死んだ人の魂のために捧げられた聖餐式はひどい悲しみの時になります。

けれども、勿論私自身は戦争を直接に経験したことはありません。だから、子供の時、「どうしていつまでも昔の出来事を思い出さなければならないのですか。現在は戦争ではなく、平和な時代なのに、どうしてこのような記念式典があるのですか」と心の中で考えたことがあります。

たぶん、昔々、普通のイスラエル人の子供の心にも同じような考え方が起こっただろうと思います。即ち、どうしていつまでも昔行われた出来事を記念しなければならないのですか。昔エジプトを出国できたという勝利は私達今住んでいるカナンから遠くにある国であり、私達の時代ではなく、先祖たちの時代の出来事なのです。又、いつも聖書やラビやお父さんに出エジプトの話聞かされるのは全然面白くないです。

けれども、ユダヤ人の予言者達や先生方はこのような考え方の間違いがよく分かっていました。出エジプトの四〇年後、イスラエルの人々はやっとカナンに入りました。でも、四〇年後の世代は新しい世代なのでした。だから、カナンに定住した民はすぐ神が行われたくすしき御業を忘れてしまいました。幾度も、苦しみと自由の教えを学んでおくために、イスラエル人は荒野の中に召し出されなければなりませんでした。

一見して、現在の日本の場合は昔のイスラエルの場合と異なる様に見えます。イスラエル人は神の勝利を記念し、日本人は天皇の敗北を記念するのですから。なるほど、軍人も一般人も大勢が殺され、東京の大空襲による爆撃、広島と長崎での初めての原始爆弾投下は非常にひどい敗北でしたが、しかしこれらのことも逆説的な勝利として見ることはできないでしょうか。一方では、天皇制や軍国主義や領土拡張政策の敗北は自由や平等や民主政治を守っている新しい憲法を可能にしたのです。他方では、原子力戦の苦しみを直接に経験したために、世界のどの民よりも、日本人の心の中では平和に対する願いが本当に植え付けられています。

だから、今年記念している四十年前の出来事は敗北でもあり、勝利でもあります。このような出来事には二つの解釈ができます。この世の知識、自己本位の高ぶり、軍事力にとっては、戦争の敗北はいつもだめです。でも、平和と愛と希望にとっては、敗北は勝利に成り、新しい命の初めが得させられるのです。

昔のイスラエル人と同じように、この新しい命を味わうために、幾度も苦しみを記念し、幾度も荒野に召し出されなければなりません。でも、イスラエル人の経験にまさるイエスの十字架のしるしもあります。イエスの十字架も二つの意味があるしるしなのです。世の見方によると、十字架はつまずきであり、愚かなものであり、失敗してしまった一人の死ですが、信仰の見方によると、同じ十字架は神の力であり、神の知恵であり、神の御子の栄光を讃えることなのです。そのために、日本人の一九四五年にあった経験がイエスの十字架にあずかることであるとさえ言うてもよいと思います。

さて、イエスの十字架・よみがえりの出来事は、四〇年後ではなく、五〇日ばかり後のことであり、又未来の世代に対しては約束ばかりでなく、まさしく同じ人の一生の変形なのです。聖霊降臨というその時に初めて、不思議なことですが、イエスの弟子達は主の声で話をさせていただきました。即ち、使徒達は自分自身の口を通して神様の息が出て来るということを発見し喜んだのです。

十字架の経験である戦争の四〇年後に、一九八〇年代は聖霊降臨の復興になっています。今一度、イエスの教会はイエスの御霊の声によってこの世に対して話しているのです。即ち、世界中のどの国の言葉をも使い、悔い改めに召し、新たなる命の望みを施し、平和を語ってくださる声なのです。又、世に対してだけでなく、教会員である我々に対しても神である聖霊の声は話してくださるのです。私達をピースメーカー、即ち、平和をつくりだす人達の奉仕に召されているのです。

ことに、イエスの十字架・敗北・勝利の記念であるこのミサでは、現在の世界の中でイエスの十字架・敗北・勝利にあずかっている人々皆の声によって聖霊が私達に対して話しています。原子病で病んでいる人達にも、戦争未亡人、戦争孤児にも、最近の戦争によって難民になってしまった人達にも、現在行われている戦争の犠牲者にも、戦争の十字架を負っている誰の中にも聖霊が宿ってくださるのです。そして、キリスト御自身の口から出たように、その苦しんでいる兄弟姉妹達の口から出て来る聖霊は我々の心に話しかけています。どのような言葉を話しかけているのですか。「忘れないでください。それは、戦争の苦しみ、戦争の破壊、戦争の罪をいつまでも忘れることなく、覚えていてください」という言葉ばかりしか出てこないのです。

皆さん、どうぞ、裂かれた体と流された血を飲食し、聖霊に満ち足らされ、新しい命にあずかる時、ますます主の平和の器として献身してゆくことができるように祈りをいたしましょう。

(※ マイケル・イブグレイブ師は十ヶ月間日本語を勉強され、この説教当時、日本聖公会横浜教区千葉復活教会で二年間お働きになりました。この説教原稿は師がはじめから日本語で書かれたものです。帰英後は、カンタベリー大主教の宗教間対話に関するチャプレン、ロンドン近郊サウスウォークでアーチディーコンを務めた後、現在はウーリッジ教区主教としてお働きになっています。2012/05/28 記)